HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	高山寺蔵「学問印信」掛板について(退職記念)
著者	徳永，良次
引用	北海学園大学人文論集，45：216-177
発行日	2010-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

高山寺蔵「学問印信」掛板について

徳永良次

一　はじめに

本稿は、明恵上人がまだ高山寺の土地を下賜される以前、建仁年間（1201～）に紀州において修学していた頃に作成された木製掛板の（再）発見について報告するものである。この掛板は平成二十一年五月の高山寺典籍文書綜合調査団による調査の際に、開山堂に隣接する旧経蔵から発見されたものである。

この「学問印信」と称する掛板については、古来、さまざまな調査により報告されてきたのであるが、近年の高山寺典籍文書綜合調査団による悉皆調査では、理由は不明ながら調査対象から漏れていたため、経蔵目録（『高山寺経蔵典籍文書目録第一～第四』）や、『高山寺善本図録』などには登載されていない。これは当時の調査団による調査対象がそもそも「典籍文書」であるので、木製の掛板などは対象外とされるのはある意味仕方のない事とも言えよう。しかしながら、中世の禁制を記した高札なども『高山寺善本図録』では紹介されることもあり、紙本でなくとも学問的に重要なものは扱われている。内容的に見ても明恵上人とその同行の弟子達の高山寺以前における宗教活動の実態を物語るものとして、また、それが高山寺において多くの戦乱や自然災害を乗り越え長い年月大切に保管されてきた実態を知る資料として極めて貴重なものと考えられるので、今回ここに写真を添えて体裁等の概略について報告したいと思う。

（一）

さらに、合わせて納められていた「課業印信」についてはこれまで一切報告がなされていない新資料であるのでこの機会にこの資料についても紹介していきたい。

二　発見の経緯

この「学問印信」については、その写しと考えられる複数の資料があることはすでに私見を述べたことがある。[注一] 筆者は近年高山寺における聖教の保管と整理について検討を加えており、明恵上人の高弟である定真（空達房定真）と霊典（義淵房霊典）が草創期の経蔵典籍の再編成に大きく関わっていることを推定した。定真の事績については先学による詳細な研究が公にされているものの、霊典による高山寺経蔵の再編成や聖教目録の作成に関してはまとまった検討は加えられていなかったのである。[注二] そこで、筆者は高山寺内外に現存する資料から霊典の事績を纏めてみることとし、いくつかの論考を公にした。[注三] 以下、霊典がいかに聖教目録作成の経緯解明のために重要な鍵を握る人物であるかについて再述する。

明恵上人示寂後、高山寺の聖教は再編成を施されたものと見られる。[注四] さらに数年を経て大規模な聖教の整理と再編成、それに伴う聖教目録の整備が高山寺の一大事業として行われた。これが一般によく知られている建長年間の目録作成活動である。

この時作成された聖教目録は、「高山寺聖教目録」、「高山寺経蔵聖教内真言書目録」「法皷臺聖教目録」である。現存する大規模な聖教目録には他に「方便智院聖教目録」があるがこの目録の詳細については作成時期、初期の状態、作成者ともに現時点では不明という他はない。[注五] 後考を待ちたい。この目録作成活動に関わったのは明恵上人示寂後の高山寺諸役の中では、義淵房霊典のみである。なぜなら寺主空達房定真と学頭義林房喜海は建長二年に相次いで示寂しているからである。そのために建長三年前後とされる目録作成の事業は、残された高山寺知事である義淵房霊典が中心とならざるを得ない状況になったと考えられる。

つまり、高山寺の聖教がどのように整理され、現代にまで受け継がれてきたか、その源流を探るには義淵房霊典の高山寺における位置と事績を詳細に検討することが極めて重要となるであろう。このため筆者は近時、義淵房霊典の事績について調査・検討を加えていたところであったのであるが、その過程で、名称はそれぞれ「学問印信」あるいは「成弁印信次第覚」などと異なるものの内容

的には殆ど同一の資料が高山寺内外に所蔵されていることが判明していた。詳細は後述するが、当該資料に記載されている本奥書によればいずれも「建仁元年九月一日」となっており、明恵上人がまだ成弁と称しており、紀州において宗教活動をしていた時期の作成に係るものであり、上人の教学活動を知る上でも重要であるばかりか、同行の僧侶として霊典の名前も見られることから、明恵上人と霊典の関係の深さを知るためにも極めて重要なものであると考えてもいた。

平成二十一年五月に実施された高山寺典籍文書綜合調査団による綜合調査の際に、筆者はいわゆる「明恵函」といわれる、高山寺経蔵聖教類第四部第一四八函の全点調査を実施していた。この一四八函が「明恵函」と称される所以は、明恵上人自筆の夢記が複数点納められているのみならず、明恵上人に関わる資料が相当数集中的に納められている事による。例えば先頭からの十点を示してみると以下のようになる。（番号は、一四八函内の通し番号）

1　栂尾御物語上下　二冊（第一部ニ別置、第254号トスル）
2　栂尾上人物語　一冊（第一部ニ別置、第255号トスル）
3　（欠番）
4　明恵上人伝記　一冊
5　明恵上人伝拾遺記　一冊（一部分江戸時代正保三年顕証筆）
6　最後御所労以後事　一冊
7　明恵上人神現伝記　一巻
8　栂尾山明恵上人伝上下　二冊（第一部ニ別置、第256号トスル）
9　上人記　一冊
10　高山寺明恵上人行状抄　一冊（顕証筆）
11　上人之事　一帖（鎌倉中期写「禅浄房記」）

（三）

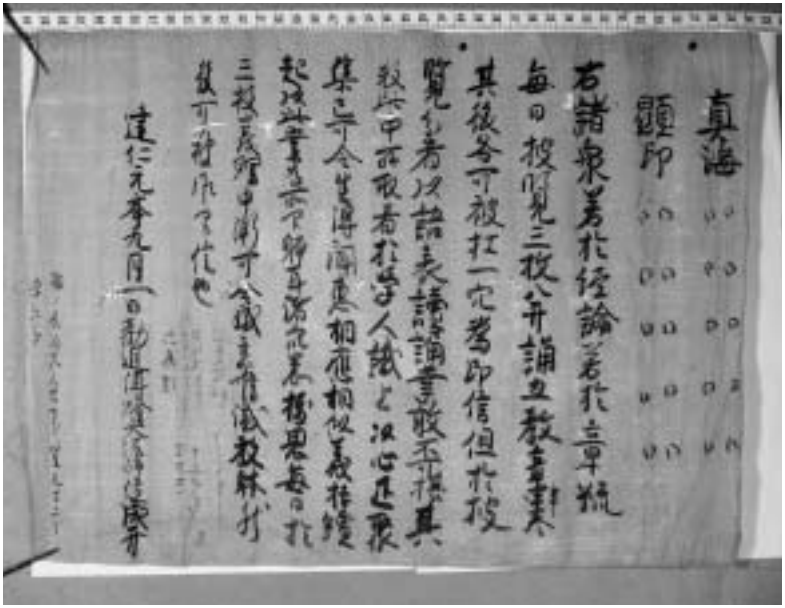
（四）

このように一四八函の先頭の十点（欠番のものを除く）はすべてが明恵上人に関する記録類であり、一四八函ではそれ以降の殆どの資料も明恵上人に関する記録類で占められており、この函に納められている資料を丹念に点検することには重要な意味があると推定されるのである。

さて、この一四八函の32号に「学問印信」と称される一巻の資料がある。次にその写真を掲載する。

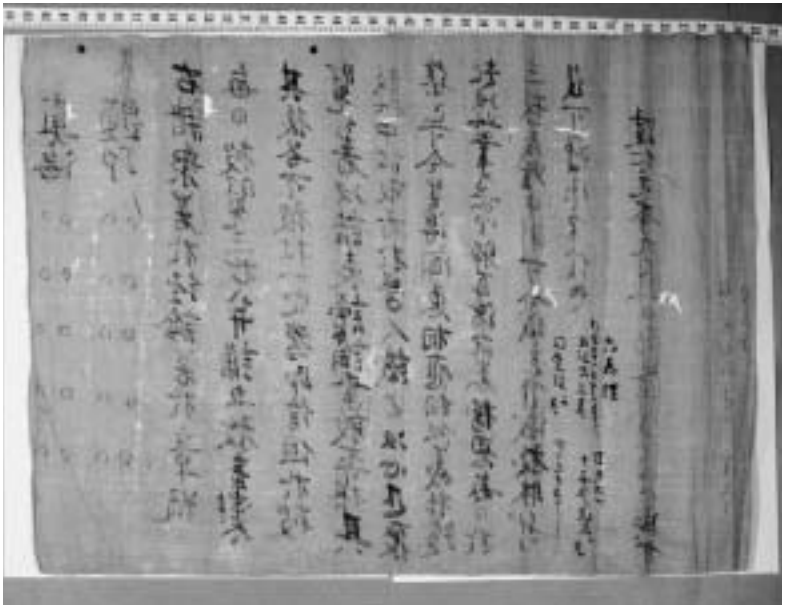
第一紙　表

第二紙　表



第一紙　裏

第二紙　裏



第三紙　表（「課業印信」）

第三紙　裏（「課業印信」）

（七）

（八）

高山寺典籍文書綜合調査団編の『高山寺経蔵典籍文書目録第四』に記載されている書誌等の記事は以下の通りである。

32　學問印信　　一巻

○江戸時代初期寫、巻子本、柿色薄手楮紙、無點、朱書及ビ墨書ノ裏書アリ、

（外題）「學問印信　闕伽井房」

（内題）「大行事須菩提大阿羅漢／定　毎日學問印信次第」

（奥書）建仁元季九月一日勧進傳燈大法師位成弁（以上本奥書）

板ノ長貳尺九寸七分　竪九寸二分／厚六分

（○板書ノ寫シナリ、）

後述するように、この資料についてはすでに検討したところであり[注六]以前にも原本調査を実施したのであるが、目録にも記されているように原本には元になったと考えられる掛板の寸法が別筆で書き込まれていた(写真 第二紙 表 参照)。この寸法を記したのは筆跡から江戸時代初期の仁和寺の学匠で高山寺経蔵の再編成及び聖教目録の整理・作成に尽力した顕証（1597―1678）による書き込みと考えられた。顕証は仁和寺のみならず高山寺の経蔵整理・聖教修補に尽力したことが知られ（密教大辞典p473）ており、その際には現物である掛板が高山寺に存在し、顕証はこの掛板を実際に採寸して書き込んだものではないかと推定できるのである。

右に示した資料の写真を見ても分かるとおり、板を吊し掛けておくための穴の位置までも記載されており現物の掛板を忠実に模写したように見えるのは少なくとも江戸時代初期に高山寺にこの掛板が現存していたと考えるのが自然と思われた。

さらに、明治十八年に当時の高山寺住職である錦小路証成師が作成した「寶物寄附物古文書什物取調牒」と題する資料が近時発見された[注七]。これは当時高山寺に現存する聖教のみならずあらゆる文物についての目録であり、従来必ずしも明らかでなかった明治期における高山寺の所蔵状況を示すものとして重要な資料である。この資料の「寶物部」中の十頁の部分に「学問印信」の所蔵を示す次

のような記述があることを見いだした。

二階○同　一　學問印信并課業印信板　上人筆　箱入　二面　（印記「封」）

この記載によれば、「学問印信」は「課業印信」とともに明恵上人の御筆になるもので箱に入れられて、経蔵（現在の高山寺経蔵ではなく、寺内にある開山堂に隣接する旧経蔵である）のしかも二階に収められていることを示している。

ここまでの証拠をもとに、あるいはこの「学問印信」の現物である掛板そのものが高山寺内にとりわけ旧経蔵の中に残されているのではなかろうかという予測をたて、五月二十六日に調査団の石塚晴通先生にご相談したところ、その蓋然性は高いので高山寺ご住職に調査の過程をお話してご存じのことがないかどうか、お伺いをたてていただくことになった。翌日、筆者は石塚先生とともに現高山寺ご住職である小川千恵師のもとを訪ね、これまでの経緯をお話しして「学問印信」掛板についてご存じないかどうかをお聞きしたところ、開山堂に隣接する旧経蔵の中は高山寺典籍文書綜合調査団による悉皆調査・目録作成の際にすべて点検したはずであるのでそのようなものがあることは記憶にない、というお返事であった。しかし、念のため再度旧経蔵の中を調べてみたいという石塚先生の申し出に対してご住職の快諾をいただいたのであった。

そこでさっそく五月二十七日午前九時より石塚晴通先生、池田証寿先生と徳永良次の三名で旧経蔵の調査を開始した。始めに明治十八年の記録を頼りに経蔵の二階をすべて再点検したが何もそれらしきものは見あたらなかった。ご住職のお話では一階部分は法具や近代以降の使わなくなった道具類ばかりで、そのような明恵上人に関わる寺宝はないであろうということであったが、念のため一階も調査することとした。しかし調査団のメンバーの誰も現物を見た者がなく、建仁元年に作成された明恵上人自筆のものであるとするならばすでに八百年も経ているのでどのような状態であるかも不明であった。長年の自然災害や戦乱、それでなくても高温多湿の栂尾の地は環境的に決して良好とはいえない。[注八] あったとしてもすでに相当朽ち果てつつあるのではないか、何らかの木片があったとしてもそれが探し求めていた「学問印信」を記した掛板かどうか判別がつくだろうか、さまざまなことが想像された。

（九）

（一〇）

そのうちに、経蔵の一番奥にしつらえてある棚の中段に長方形で厚みのあまりない木製の箱が目にとまった。暗い棚からその箱を明るい入り口近くに取り出して箱上面に記してある箱書きを見ると「学問印信／課業印信」など（詳細後述）と大きく墨書されていた。箱の上蓋を持ち上げてみると中にはまさしく「学問印信」の内容が記された掛板などが納められていたのである。

このようにして、今回報告する「学問印信／課業印信」の木製掛板は（再）発見されたのである。

三　学問印信

三―一　外箱体裁

（外箱内側）

（外箱外側）

（一一）

（一二）

「学問印信・課業印信」を納めてある外箱の体裁等について記す。

○外箱体裁

（上蓋）縦九十七、三糎、横三十五、五糎、高さ四、五糎

（紐）白色木綿青地縦線織り込み（江戸時代天保頃）

（上蓋表書）

梅尾御筆

學問印信　一枚

課業印信　一枚

方便智院蔵

（上蓋裏書）

根本和上御筆學問印信一枚課業印信一枚外箱新調

伏願　上人遺法之佛子等依此印信之旨可成立法界

等流唯識真如之教躰云々

天保十四年癸卯六月二十日

方便智院沙門慧友護

この箱書の「外箱新調」という記事により掛板が江戸時代天保年間以前にも外箱により保護されるようにして伝えられてきたことが推定される。慧友は江戸時代末期の高山寺僧で当時の困難な状況にあっても非常に精力的に寺内聖教等の修理などに尽力した人物として知られている。現存する聖教の包紙や書き込みにも慧友の署名はしばしば見出されるし、その特徴的な筆跡から慧友によるも

のと考えられる書き込みも多い。高山寺現存の様々な記録から慧友は十無尽院の第二十二世と三尊院十九世となっており、歴史ある二つの塔頭の兼帯であることが判明している。十無尽院は明恵上人を第一世として喜海―弁清―経弁―高経とつづき、密雅―慧友―定淵と続く最も伝統ある塔頭のひとつである。また、三尊院も円道房信慶を第一世として、信慶―澄弁―澄恵―練明……十八世に密雅―慧友―定淵となっている。別に高山寺に所蔵されている慧友自身による資料として「左右記」（第四部第四八函20号）があるが、それにも十無尽院代々が記され、慧友は若干の数値の違いはあるものの密雅―慧友となっており、末尾には次のように記している。

十無尽院相承華厳ノ血脈自リ
根本本願上人至ルマテ愚身ニ第二十一葉也
文化四年丁卯八月廿二日十無尽院住職
三尊院兼帯之令旨
十無尽院慧友記之

このように慧友は十無尽院・三尊院の兼帯であり自身を華厳宗の法脈であると称している。この意識が「学問印信」の掛板を寺宝として尊重しようとする行為の根底にあると見てよいだろう。

三―二　木札等

また、箱の内部には「学問印信・課業印信」以外に木製の札が二枚と新聞紙が底に入れてあった。これは「学問印信・課業印信」の二枚を保護するために不要になった木札等を底に敷いていたものと思われる。この内の一枚の木札には「天保六年」の年紀がある。外箱が天保十四年に新調されているので、この木札は天保六年に作成され、その後役目を終えて下敷きとして再利用されたものであろう。次にこれらの体裁を記す。また、同様にはさみこまれた新聞は昭和五年の大阪朝日新聞であった。これから考えるに、この外箱は江戸時代末期天保十四年に「学問印信」等二枚の掛板を収納するために慧友により作成され、明治以降同じ箱で保管された後、

（一三）

いずれかの段階で取り出され（一度とは限らない）少なくとも昭和五年以降それほど遅くない時期に再び収納され現在に至っているということが判明する。後述するが、その後この箱が注目され開けられたという可能性は低い。

（一四）

木札　裏

木札　表

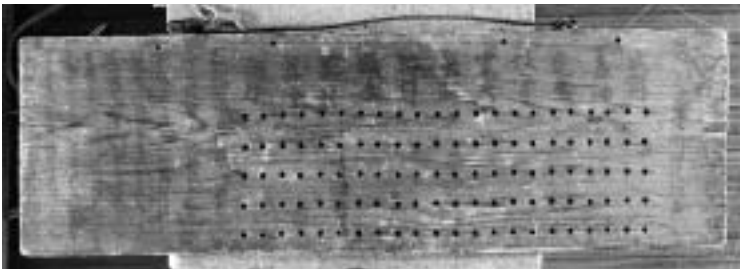
（木札1）
縦六十四、五糎、横十四、八糎
（表面）
一切日皆善　一切宿皆賢
vaṃ　諸佛皆威徳　羅漢皆断漏
以此誠實言　願我常吉祥
（裏面）文字等ナシ

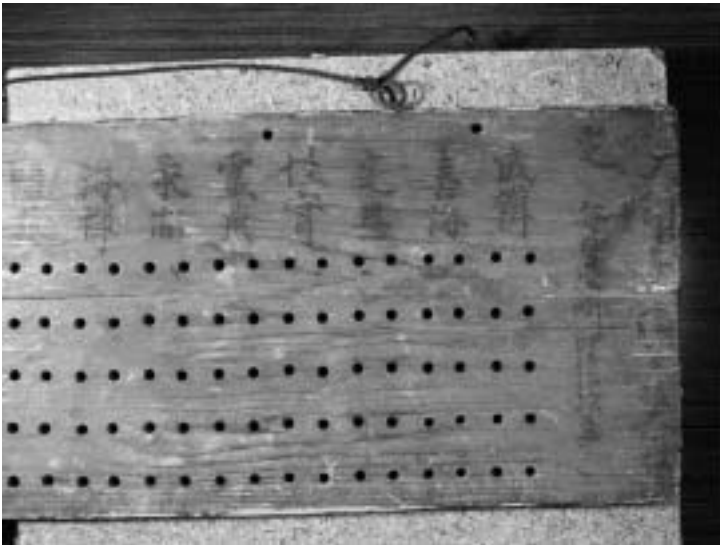
（木札2）
縦五十八糎、横八、六糎～六、九糎
（表面）
jña　天保六年乙未
奉転讀大般若経村内安全厭禳疫癘祈所
（裏面）
梵字　十字三行（左右欠カ）

（新聞紙）
昭和五年八月九日付大阪朝日新聞五・六面　一紙

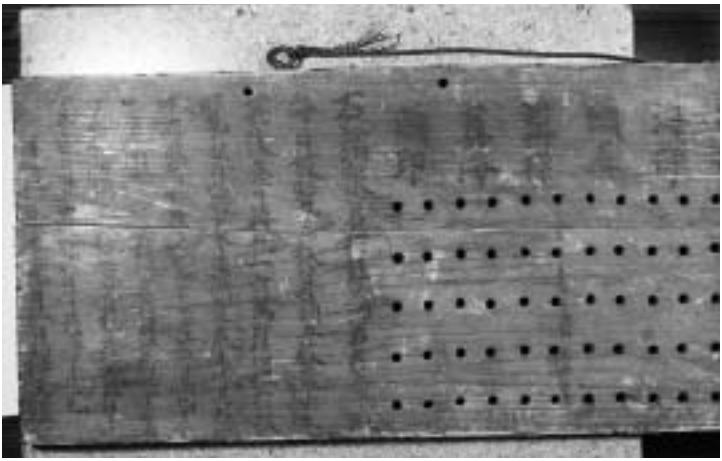
（一五）

三―三　「学問印信」掛板





右側拡大



左側拡大

○体裁

縦二十八糎、横上部九十一糎、下部九十、七糎、厚一、六糎、材質不明ながら檜あるいは櫟状の木目が見られる。木材は重厚で耐久性が高そうに感じられ、桐材のような軟質な感じはない。表面は槍ガンナのみの仕上げと見られ、やや凹凸を残す。僧名の下に空けられた穴が各十個全一一〇個あるがいずれもほぼ均等に空けられており穴の状態も良好である。上部四ヵ所に穴があり、右側から十四、六糎、さらに十四、六糎と等間隔に穿孔される。同様に左側は端から十八、〇糎、さらに十四、八糎の間隔が開くという寸法となっており若干左側が幅広ではあるがほぼ左右対称となっている。さらに上部側面部分に近代に取り付けられたとみられる金属鐶がこれも左右端からほぼ二十糎の対称の位置にあり紫地に白色糸を織り込んだ紐が取り付けられている。これは近代のいずれかの時期に掛板として高山寺で使用されていたことを示すのであろうか。

保存状態は極めて良好で、中央部を横切るように板の割れが二ヵ所見られるがすぐに分断されてしまうような危険性はないと見られる。周辺部もわずかに擦れによる摩滅があるが大きな欠損等はない。元の吊り下げのために空けられた穴と僧名の下に空けられた各十個の穴も非常に綺麗で状態は良い。文面は左右いっぱいの位置まで記載されているが現存の掛板の状態および江戸時代書写の「学問印信」（一四八函32号）の文面と比較しても欠損はないと見て良い。

次に表面の翻刻を示す。（穴は省略し文面のみとする）

大行事須菩提大阿羅漢
定　毎日學問印信次第
成辨
喜海
定恩
性實

（一七）

（一八）

霊典
永胤
海禅
顕真
辨操
真海
顕印

右諸衆若於経論若於章疏
毎日披覧三枚并誦五教章半巻
其後各可被杜一穴為印信但於披
覧分者以語表読誦業敢不可構其数此
中所取者於学人識上以心正聚集已可令
生得聞慧相応相似義持続起以此業為所
印体耳諸衆悉攝思毎日於三枚義理中漸
可令成立唯識教体然後可彼作印信也
建仁元年九月一日勧進傳燈大法師位成弁

文字は掛板の上下左右を隙間なく使って整然と書かれている。僧名は成辨から始まり文字の大小なく均等に大きく記される。後半の覚書部分はやや小さめで文字が詰まった感じで、後半に行くに従って少しずつ小さくなっていくが決して読みにくいものではない。文末の年紀と署名部分は掛板左側ギリギリに記され、とりわけ末尾の「成辨」の署名はほとんど読み取れなくなっている。また、途

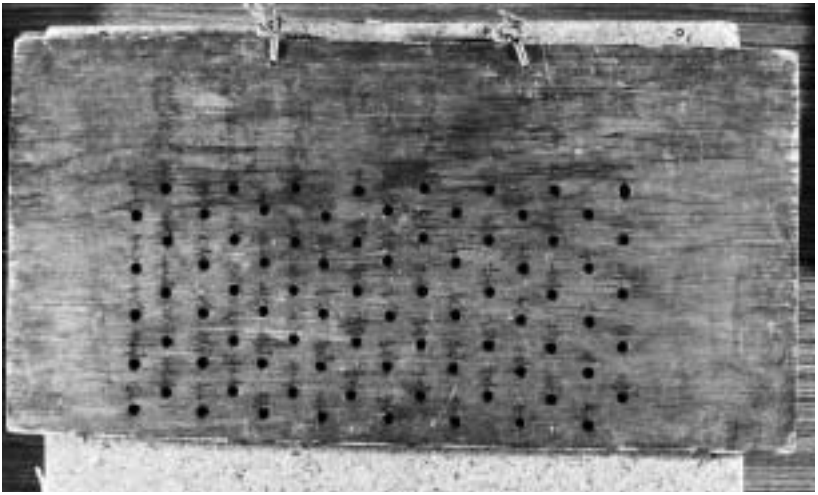
中一カ所脱字を補ったと思われる箇所があるが、別筆と思われ、かつ文脈も通らない文字（「構」。本来は「攝」であろう）で記されているので後筆と見られる。その加筆時期は不明であるがそれほど新しいものとも思われない。

裏面には上部中央に墨書で図のような書き込みがあるが、これが何を意味するのか不明である。あるいはこの板の掛け方を示したようにも見えるがあくまでも推測でしかない。裏返して右側下部は表面を削りなおしたようになっており元の木肌が現れている。これを見るとあるいは掛板は完成後に何らかの防腐処理等を施されているとも推定される。なお検討を要する。

四　「課業印信」掛板

（一九）

課業印信　表



○体裁

縦二十七、三糎、横五十三、六糎（下部五十三、七糎）、厚さ一、三糎～一、二糎、材質は「学問印信」とは異なりやや軽質の杉材のように見える。しかし、厚さが薄いために軽質に感じられるだけかもしれない。後考を俟ちたい。表面は「学問印信」と同様槍ガンナが使用され仕上げられている。それ以上の平滑処理は施されていないのは同じである。

吊すための穴が上部に二カ所のみ空けられている。位置は右端から十八、五糎、左側が端から十八、〇糎とほぼ均等な位置に穿孔される。また、上面ほぼ中央部に穴を埋め戻したような箇所があるのは「学問印信」と同様に金属鐶を取り付ける目的があったものか。ただしこれは利用されず、現状では元の吊し穴に緑色の紐が取り付けられている。これも近代以降取り付けられたものと見られる。

保存状態は「学問印信」よりさらに状態が良く、表面の割れや欠けは全くと言って良いほど見られない。穿孔された穴は上面二カ所、さらに「課業」を果たした証拠として塞ぐための穴が八十カ所、合計八十二個の穴が空けられているがいずれも綺麗で欠けなどは全くない。文面は左右にゆったりと余白を残し、上下は隙間なく文字が書かれている。

次に表面の翻刻を示す。

複　一〇　二〇　三〇　四〇　五〇
　　六〇　七〇　八〇　九〇　十〇
他學　十一〇　十二〇　十三〇　十四〇　十五〇
　　十六〇　十七〇　十八〇　十九〇　廿〇
日中　廿一〇　廿二〇　廿三〇　廿四〇　廿五〇
　　廿六〇　廿七〇　廿八〇　廿九〇　卅〇
自學　卅一〇　卅二〇　卅三〇　卅四〇　卅五〇
　　卅六〇　卅七〇　卅八〇　卅九〇　四十〇

（二一）

（二二）

経	卅一〇	卅二〇	卅三〇	卅四〇	卅五〇	卅六〇	卅七〇
卅八〇	卅九〇	五十〇					
論議	五十一〇	五十二〇	五十三〇	五十四〇	五十五〇	五十六〇	五十七〇
五十八〇	五十九〇	六十〇					
初夜	六十一〇	六十二〇	六十三〇	六十四〇	六十五〇	六十六〇	六十七〇
六十八〇	六十九〇	七十〇					
後夜	七十一〇	七十二〇	七十三〇	七十四〇	七十五〇	七十六〇	七十七〇
七十八〇	七十九〇	八十〇					

（并念誦）

文字の書体は「学問印信」と同筆と見られる。保存状態が良好なため文字の擦れや欠損はほとんどないと言って良い。年紀や人名など一切記されていない。裏面は「学問印信」同様何も記されていない。

五　先行研究

さて、この（再）発見された掛板二枚が、いつ誰によって知られるところとなったかについて検討する。管見によるとこの資料について言及ないし資料紹介を含めた翻刻などを行っているのは次の資料・研究者である。（成立年代順・敬称等省略）

1　方便智院聖教目録（寛永新目録）
2　明治十八年「寶物寄附物古文書什物取調牒」の記録
3　村上素道『梅尾山高山寺明恵上人』（高山寺　昭和四年十二月）
4　大日本史料（東京大学史料編纂所　昭和五年）
5　田中久夫『明恵』（吉川弘文館　昭和三十六年）

6　田中久夫『鎌倉仏教雑考』（思文閣出版　一九八二年）
7　奥田勲『明恵――遍歴と夢――』（東京大学出版会　一九七八年）
8　国会図書館蔵「高山寺古文書」
9　高山寺蔵本（一四八函32号）

右の研究・翻刻のうち2を除くいずれも「学問印信」についてのみであって、「課業印信」はまったく注目されていないのは不思議である。掛板が一体のものとして扱われてきたのかどうかについても検討を要すると思われるが、現在までにそれに関する記録を見いだせていない。さて、これらの先行文献がどのように扱っているのか、以下、個別に見ていくこととする。

1　方便智院聖教目録　東第三箱（裏書）

「学問印信」の記事が見える最も古い資料であり、それは次のように目録に裏書されている。

毎日学問印信次第一紙

「方便智院聖教目録」の成立については全く不明な状態で、室町時代文明年間をさかのぼることが出来ない。その旧「方便智院聖教目録」（旧目録とする）を一部引き継いで新たに作成されたのが寛永期の新「方便智院聖教目録」（新目録とする）である。右にあげた裏書記載の記事は、新目録のみに記されているものであって、旧目録には見あたらない。しかし、旧目録は欠損が甚だしく該当部分も料紙の下部の大半が失われているのが現状である。そこに「学問印信」の記事があったとも推定されるがその可能性は極めて薄い。さらに言えば、新目録には東第三（正確には「東第二」と「東第三」は統合されて記載）末尾の裏に「春日御託宣記一帖」と「分別善知識次位一紙」とともに記されている。当初作成の目録に脱落したものを点検中に追加したのか、後から何らかの理由で加

（一二三）

えたものであるのか現時点では不明である。

ただ、方便智院とこの「学問印信」との関わりは深く、先述の通り、江戸時代末期天保十四年（1843）に高山寺僧の慧友が新調した外箱には「方便智院蔵」とあることから新目録との関係を考えると非常に興味深いところである。

さて、この新目録に記載されていた「学問印信」とは何をさすのであろうか。結論的に言えばこれは一四八函32号の「学問印信」をさすと考えるべきである。それは新目録の書込には「一紙」とあることから明らかである。さらに言えば、現在一四八函に納められている資料には、仁和寺の顕証による掛板の寸法の書き込みがあり、これは顕証が実際の掛板を採寸した結果をこの紙の資料に書き入れたと考えられるからである。

結局、この新目録に記載の「学問印信」とは従来知られていた紙の資料のことではあるが、江戸時代寛永期においては実際の掛板も高山寺に現存していた傍証ともなるものである。

2　寶物寄附物古文書什物取調牒

（奥書）葛野郡楳ヶ畑邨第二百十七番戸／真言宗大本山智積院所轄／華厳宗本山高山寺住職／明治十八年七月二日　華族　錦小路証成

（本文抜粋）（十頁）

二階「○同」　一學問印信并課業印信板　上人筆　箱入　二面（印記「封」）

本資料は近年高山寺現ご住職小川千恵師から調査団に示されたものでこれまでほとんど知られていなかったものである。本資料の重要性に関しては石塚晴通氏による報告[注九]に尽くされているので要点のみ示すこととする。

二〇〇八年五月の高山寺経蔵調査の節に、高山寺御住職より調査団に明治十八年七月二日付け「宝物寄附物古文書什物取調牒」一冊が示された。其れは、青野線袋綴の表紙共六十四丁の冊子であるが、明治初期の高山寺の経蔵その他の状況を如実に物語る重要資料であった。筆者（石塚氏のこと）は、かねがね鎌倉時代明恵上人在世時より経蔵目録が作成され建長目録を初めとする鎌倉中期、室町時代文明期の方便智（ママ）目録、江戸初期の寛永目録、現代の調査団目録と一万点を越す規模の目録があり、経蔵の構成と伝承に関する検証が可能な希有の資料に注目し、筆者を代表とする科学研究費を数度に亘って交付され目録類のデータベース化も果たしていたので、其の空白期間を埋める極めて有力な資料であることを直感し、以後調査を進めてきた。

（平成二十年度高山寺典籍文書綜合調査団「研究報告論集」111頁）

石塚氏が指摘されるように、江戸時代末期から明治・大正・昭和初期にかけての経蔵の実態は必ずしも明らかになっていなかった。とりわけ、江戸時代寛永期の経蔵整理と聖教の補修後に時期は不明ながら大規模な聖教の編成替えが行われたことが判明している。これは現存する経箱の表面に記された記事により知ることができる。（注十）

ここで示されている「学問印信」は明らかに掛板そのものを指している。開山堂の経蔵に高山寺の聖教や什物が収蔵されていた時期の調査目録であるので、その信頼性は極めて高いものである。なお、調書の上部に記されている情報は、資料名とは別筆（あるいは別時期）に記されたもので後のインスペクションに関わるものであろう。末尾の印記「封」もこれと同様のものと考えられる。

いずれにせよ、この資料の出現により明治十八年には高山寺に「学問印信」の掛板が存在しており、それが高山寺の関係者により確認された確実な証拠となるものである。ただ、いわゆる棒目録形式の簡略表示であるので文面等を含めた体裁については不明である。

3　村上素道『梅尾山高山寺明恵上人』（昭和四年十二月）

定　大行事須菩提大阿羅漢、
　　毎日ノ学問、印信次第

成弁
喜海
定恩
性実
霊典
永道
海禅
顕真
弁操
真海
顕印

右ノ諸衆、若ハ於二経論一ニ、若ハ於二章疏一ニ、毎日披二覧シ三枚一ヲ、並誦二五教章半巻一ヲ、其後各〻可レ被下杜キ二一穴一ヲ為中印信上ト。但シ於二披覧者一ニ、以テ二語表読誦ノ業一ヲ、敢テ不レ可カラ攝ル二其数一。此中ノ所取ハ者、於テ二学人ノ識上一ニ、以テ二心正聚シ已ルヲ可レ令下ム生二得シ聞慧一ヲ相応、相似、義持続起セ上以テ二此ノ業一ヲ為ス二所印ノ体ト一耳ノミ。諸衆悉ク攝シテ思ヲ、毎日於テ二三枚ノ義理ノ中一ニ漸ク可レ令ム成二立セ唯〻識ノ教体一ヲ、然シテ後可キ被レ作サ二印信一ヲ也。

建仁元年九月一日　　勧進伝灯大法印　成弁

村上素道師は京都山科の永興寺の住職である。師と高山寺との関係はその著書によれば、「禅師は小衲の先師土宜法龍大僧正と道交あり。また夙に我開山上人の道風を慕ひ、屢々我山に来て上人の塔廟を拝し、遺著、遺墨を展覧す、誠に法縁浅からざるものありと謂つべし。（中略）積年史料の蒐集に勤め、今夏に至て、遂に斯の伝記編纂を完了せらる。」（巻末土宜覚了師跋文）

とあり、昭和初期に高山寺において当時の寺主土宜覚了師とりわけ前寺主法龍師と交誼があり、経蔵の資料を博捜していたと見られる。その労作が本作であり、資料的にも現在では知られていない「高山寺代々記」を翻刻するなど研究上も注目すべき点が多い。

さて、本書には巻末に右に示したような「学問印信」と見られる翻刻が掲載されている。原本に忠実というよりは読みやすいように訓点を施してあるのが村上本の特徴で原本の姿を正確には伝えていないと思われる。村上師ははたして掛板と写本のどちらの「学問印信」を見たものであるか俄には断定できない。しかし、後で検討するが、村上師は掛板を見たことは十分考えられる。

4　大日本史料　第五編之七　○貞永元年正月十九日　五一五頁

〔毎日学問印信次第〕○高山寺所蔵／掛板

大行事須菩提大阿羅漢

定　毎日學問印信次第

成辨

喜海（裏）義林房

定恩

性實（裏）法智房

霊典（裏）義淵房

永胤

海禅

（二七）

顕真（裏）圓修房
辨操（裏）恵光房
真海
顕印（裏）明鏡房
右諸衆、若於経論、若於章疏、毎日披覧三枚、只誦五教章半巻、其後各可被杜一
穴為印信、但於披覧分者、以語表読誦業、敢不可攝其数、此中所取者、於学人識
上以心正聚集、已可令生得聞思相応相似義、持続起以此業為所印体耳、諸衆
悉攝思、毎日於三枚義理中、漸可令成立唯識教体、然後可被作印信也、
建仁元年九月一日　　勧進傳燈大法師位成弁

本書にもすでに「学問印信」を紹介した翻刻が掲載されている。しかしながら、「大日本史料」全般に関わる問題であるが、底本あるいは出典が何に依っているかが必ずしも明確でなく、これも底本に関する記述はない。冒頭部分に高山寺所蔵／掛板とあるのは現物を見た事によるとも考えられなくもない。しかし、実際の掛板にはない裏書の記述から写本の「学問印信」を元にしたことは明かである。ただ、その裏書の記述が現在知られているものとは異なっている（後述）ので、そのいずれに依ったか（あるいはさらに別の写本か）も含めて詳細は不明である。

5　田中久夫『明恵』（吉川弘文館　昭和三十六年）

田中久夫氏は早くから明恵上人に関する多くの優れた論考を発表しており、本書もそのひとつである。「学問印信」に関する記事は以下の通りである。

そして経疏をよむといっても、学問的な研究のように、その文章としての意味を理解するにとどまるものではなかった。そ

れは、この年九月一日に「毎日学問印信次第」と題する掛板をつくり、成弁・喜海・定恩・性実・霊典・永胤・海禅・顕真・弁操・真海・顕印の名をつらね、それぞれの名の下に穴をあけて、右の各人が経論や章疏を毎日三枚よむか、『五教章』半巻を誦するかしてから、印信として穴をふさぐべきである。但し言葉の表面の意味をよむだけではだめで、心のなかにその意味がほんとうにうえつけられねば、教えを伝えられたしるしである印信とするわけにはいかない、という意味の注意を記していることによっても知られる。かように糸野において明恵（成弁）を中心として、これら十一人の僧が集団生活をしていたのである。（p 56）

以上が、「学問印信」に関する記事であるが、具体的な翻刻や資料の存在を示す記事は他には見あたらない。田中氏がどのような資料、高山寺に現存する掛板あるいは写本を参照したのか、あるいはすでに活字になっている前掲書を利用したものかどうかについての注記はない。

6　田中久夫『鎌倉仏教雑考』（思文閣出版　一九八二年）

本書の中に「義林房喜海の生涯」と題する論文がある。最初の発表は「南都仏教」三四、昭和五十年に刊行されたもので、田中氏自身により昭和四十九年十二月稿了と記されている。いずれにしても先行研究上の前後関係は動かない。田中氏は義林房喜海の事績を丹念に追っており、そこに「学問印信」に関する言及が記述されている。

翌建仁元年（一二〇一）九月一日付の「毎日学問印信次第」と題する掛板が高山寺に所蔵される（大日本史料五編之七、五一五頁。村上師「明恵上人」三二三頁）。これには成弁（明恵）をはじめ十一人の名前が連ねられてをり、この時期の紀州に於ける明恵の僧団の参加者を示すものである。喜海は成弁に次ぎ二番目に記され、喜海の次には、定恩・性実・霊典・永胤・海禅・顕真・弁操・真海・顕印の名がある。そして各の名の下には十箇の穴があり、さらに経論や章疏各三枚または五教章半巻を読み、それもただ読誦するのみでなく、その意味を深く心に味わひ、その一穴をふさぎ、学問の印信とするといふ意味の説明が加へられてゐる。喜海は、同行のうちでは上首であつた。（586頁）

さて、この記述により、先の5で取り上げた田中氏の『明恵』に記述されている「学問印信」が何に依拠するかが明らかとなった。右にあげたように田中氏はその出典を（大日本史料五編之七、五一五頁。村上師「明恵上人」三二三頁）と注記しており、高山寺における現物の掛板あるいは書写本を見たわけではないことはほぼ確実である。田中氏の解説にある傍線部分の記述は、田中氏が依拠した文献に「高山寺所蔵／掛板」（大日本史料）などとあることによるものと考えられ、田中氏自身が現物を見たことを表しているわけではない。

なお、同書には「明恵上人の置文」と題する論文があり、その364頁注五にもほぼ同様の記述がある。この本文は3に示した村上師の翻刻をもとに記述したものである。

7　奥田勲『明恵――遍歴と夢――』（東京大学出版会　一九七八年）

本書は、明恵上人の事績について高山寺内外の資料を博捜して一書となした労作であり明恵上人および高山寺に関する論考として最も参考となるもののひとつである。「学問印信」についても記述が見られるので、以下、引用する。

（前半省略）この表（筆者注　貞元華厳経の書写作業の一覧表）によれば、三月十九日～二十三日頃明恵・喜海・英敏・顕印・顕真・真海らが集中的に校合作業に当っている。この顔ぶれのうち、英敏を除くすべてが、建仁元年（一二〇一）の印信次第の同法に見え、当時の明恵の同行者は印信次第に見える十一人にさほど多くの人は加わっていなかったとしてよいのであろう。明恵はこの年二十八歳、喜海二十三歳、英敏二十歳、顕印に至っては十八歳である。青年によってこの教団が構成されていることが、京都・紀州・奈良を結んで修行の適地を求め、聖教を求め出すことを可能にしととして差支えないであろう。（47頁）

また、巻末付載の年表にも建仁元年の部分にこの印信の記事を掲載する。以下、建仁元年の部分のみ略述する。

○正・三より、人の為に祈祷（夢）○正・十一、行方（夢）○二・二一、病を得て糸野の前兵衛尉藤原宗光の家に居す◎二・二四、糸野にて「華厳唯心義」を著す○九・一、「毎日学問印信次第」を定め掛板とす○この年頃、宗光の館内の成道寺の後に結庵す◎この年、「華厳五十五善知識」を俊賀らに描かす（同書307頁）

このように、本書の本編と巻末記事の二カ所に「学問印信」に関する記事はあるものの、高山寺現存資料との関わりを示す注記がないことは、前出の田中氏の論考と同様である。

8　国会図書館蔵「成弁印信次第覚」　国立国会図書館蔵（『貴重書解題第八巻／古文書の部第三　高山寺古文書　九八通裏文書七四通（四軸）／WA25-81』）

本資料は右にあげた書目に写真版（裏面写真ナシ）とともに翻刻されているものである。これら一群の高山寺古文書が国会図書館の所蔵に至る来歴は同書解題に次のようにある。

本文書は明治四十年三月の購求になるもので、鶯色絹表紙仕立、題箋に「高山寺古文書　春（夏・秋・冬）」とあるが、四巻それぞれ意図して別けられているとは見えない。全九八通は殆ど書状であるが、そのうち七四通に裏文書がある。（以下略）（4頁）

明治四十年以前の来歴については不明であり、九十八通の文書が一括していたものか、あるいはいずれかの時点でまとめられたものかについてもわからない。しかし、前掲解説には、高山寺文書とされているが確定できないものも含まれている旨の記述もあるので、後に一括されたと考えてよいと思う。ここに示された「学問印信」の翻刻は次の通りである。原本未見であるが表面のみは写真があるのでそれにより適宜字句を修正（訂正）した。

（裏書）「東第三箱」

大行事須菩提□阿羅漢

覚　毎日学問印信次第

成弁

喜海　　（高山寺朱印）

定恩

性実
霊典
永胤（裏書）「義相房」
海禅（裏書）「越智房」
顕真（裏書）「□□□□名円修房」
弁操（裏書）「蓮光房」
真海（裏書）「法院僧都覚蓮房」
顕印（裏書）「明影房夷名顕□」
右諸衆若於経論若於章疏毎日披覧三枚□(并)誦□(五)教
章半巻其後各可被指(止)一穴為印信但於披覧分者以
語表読誦業敢不可構其数此中所取者於学人識上五
心正聚集已可令生得聞思相応似義持続起以此業為
所印体耳諸衆悉攝思毎日於三枚義理中漸可令成立
唯識教体然後可彼作印信也
建仁元年九月一日勧進伝灯大法師位成弁

本資料で注目すべきは二点ある。まず、端裏部分に「東第三箱」と書き込まれている点。次に、僧名の裏書に他では見あたらない記載があることである。

一点目については、1で取り上げた「方便智院聖教目録」の箱番号と一致する。これは高山寺に現存する一四八函32号の「学問印信」には見られない書き込みであって極めて有益な情報である。高山寺本の場合は「学問印信」二紙が内側に、「課業印信」一紙が

一番外側に丸められた状態で保存されていたらしく「課業印信」下部は大破している。そのために、本来ならその欠損した部分に「高山寺」（または「方便智院」）朱印記が押してあった可能性はある。国会図書館蔵本の写真版を見てみると、この資料は書き出し部分が欠損した上に別の紙を継ぎ足して冒頭の一行の上部が書き入れられており、「東第三箱」の裏書もオリジナルではなくその補修の際に同様に書き込まれたと見られるのである。これから考えるに、国会図書館蔵本とは別に同様の書写本、あるいは掛板の現物があり、補修者はそれを見ながら書き入れていったということを意味しているのである。箱番号の記入には掛板の存在というより他に同様の写本の存在と目録との対応に注目すべき点があると思われる。「方便智院聖教目録」の旧目録、すなわち室町時代文明年間を中心とする目録群には現状では「学問印信」に関する目録への記載は見られない。

二点目の僧名に関する注記であるが、詳細な検討は他日を期したいが、高山寺現存本、3の村上師の翻刻、4の大日本史料にも見られないものである。高山寺現存本と大日本史料は僧名の裏書に関してほぼ同一、村上本には裏書注記ナシであるのに対して、本書には右の写本類には見られない僧名への注記が存在し、かつ、喜海や霊典などにある裏書は逆に存在しないという大きな違いが見られることは注目に値する。

結局、これから考えるに、掛板を模写した紙本の「学問印信」には少なくとも二種類の系統を異にする写本が存在しており、それらは起源を同一にするテキストがあったにしても、いつの間にか独自に保管され伝えられてきたと見なければならない。

9　高山寺蔵本「学問印信」一巻（一四八函32号）

最後に高山寺蔵本である本書についても一言しておく。この資料は高山寺典籍文書綜合調査団による悉皆調査により登録されるまでは、注目されてもおらず検討も加えられていなかったようである。いわゆる高山寺古文書とは性格も異なり、かつ、聖教類とも言えないものであるからであろう。先の大日本史料本等と同様に裏書の注記がわかるように翻刻する。

（端裏外題）　学問印信　　閼伽井房

（三四）

（表面）

大行事須菩提大阿羅漢

定　毎日學問印信次第

成辨（裏書上面）（朱書）カクル穴／四所

喜海（裏書上面）（朱書）義林房

定恩

性實（裏書上面）（朱書）法智房

霊典（裏書上面）（朱書）義淵房

永胤

海禅

顕真（裏書上面）（朱書）円修房 歟

辨操（裏書上面）（朱書）恵光房（歟）□

真海

顕印（裏書上面）（朱書）明願房 歟

右諸衆若於経論若於章疏

毎日披覧三枚并誦五教章〻■半巻

其後各可被杜一穴為印信但於披

覧分者以語表読誦業敢不可攝其

数此中所取者於学人識上以心正聚

集已可令生得聞慧相応相似義持続

起以此業為所印体耳諸衆悉攝思毎日於
三枚義理中漸可令成立唯識教体然
後可彼作印信也
建仁元季九月一日勧進傳燈大法師位成弁

（追筆）　板ノ長貳尺九寸七分竪九寸二分
厚六分

（巻末部分裏書）　六巻経
新経五十一五十二五十三　経第廿一
出現疏三巻　十無盡蔵品一巻
円覚経二巻　阿留遍幾夜宇アリ

裏書には有益な情報が多く書き込まれている。まず、掛板の上部に空けられた穴の位置を出来るだけ忠実に示していることが判明する。その穴の位置は墨書にて表面に記され、裏面には「カクル穴四所」と明記してあるのが精巧である。この記載を見て筆者は実物がある（あった）に違いないと直感的に感じたのである。また、墨書にて数点の聖教が裏書されているのはどのような理由があるのか、現在のところその答を見出すことが出来ない。聖教は華厳に関するものであり表面の明恵上人による紀州での修行当時に華厳を修学していたこととよく一致している。末尾の「阿留遍幾夜宇アリ」とは上人の思想である「あるべきやうわ」を表していると見られ、その書写本があったことを、あるいは高山寺石水院に掛けられている「あるべきやうわ」の掛板の存在を示しているのであろうか。後考を俟ちたい。

（三五）

さて、これら「学問印信」についての先行研究・翻刻の中でも実際に高山寺の掛板を見たものと写本のみを参照した場合とに分けることができる。現物の掛板を見たことが確実なのは、9の高山寺蔵本の写本一巻である。先述の通り、この写本には末尾や裏書部分に掛板の寸法・体裁等を記しており、これは今回発見された実際の掛板のものと極めて良く一致する。次に翻刻等の記録がないものの2の明治十八年の記録も現物の掛板を記したものであることは間違いない。次に3の村上師本はどうであろうか。確実な証拠はないものの村上師は掛板の「学問印信」を見たと考えたい。なぜなら村上師本の翻刻には僧侶に加えられた裏書が見られないことが(消極的ではあるが)傍証となろう。これは、掛板の現状と同様であり、まさに掛板を実際に読んでいるものと考えられるのである。さらに言えば、村上師が『栂尾山高山寺明恵上人』を出版したのは昭和四年十二月で、今回発見した現存する掛板の下に敷かれていた大阪朝日新聞は昭和五年八月付のものである。年代的には村上師が高山寺において「我山に来て上人の塔廟を拝し、遺著、遺墨を展覧」(村上師著書巻末土宜師跋文)していた時期と一致する。このことから村上師は高山寺において掛板を実見した人物と言えよう。裏返して考えるに、この掛板は少なくとも江戸時代末期天保頃には、高山寺において保管され、明治十八年頃にも同様に扱われ、その状態は昭和初期(昭和五年)までは寺内関係者のもとで管理されていたことが判明する。

それ以外の先行文献では、掛板を見たと考えにくいものが大半である。4の大日本史料と8の国会図書館蔵本は裏書の注記等からそれぞれ別の写本による転写本と考えられ、それ以外の田中氏・奥田氏の引用部分にも実際の掛板についての言及はない。

今後さらなる検討が必要なのは、1の「方便智院聖教目録」における裏書部分のものであるが、この書き入れそのものは明らかに紙本の写本をさしているが、年代的に見て高山寺内に掛板が存在していたことは確実である。

六　ま　と　め

最後に、高山寺蔵の(再)発見された掛板がどのような性格のものかについて一言する。

まずはこの掛板の真偽、つまり明恵上人御作であるかどうかであるが、非常に難しい問題である。周知のごとく高山寺の聖教には極めて保存状態の悪いものも多く、また、多くの戦乱や自然災害により相当数の聖教類が失われたことが知られている。例えば草創

期の記録によれば当初寺内経蔵に一切経が二部あったにも関わらず、現在では一点も残っていない。また、この掛板は明恵上人が高山寺を創設する以前の紀州における修学を実践していた頃のものであって高山寺とは直接の関わりは薄い。さらには、掛板の内容は華厳に関わる修業のあり方、実践法を示したものであって、高山寺において華厳の学統は早く衰退してしまっていることから、これ(注十一)が長く大切に伝えられてきたのは奇蹟とも言えるのである。

その一方で、高山寺は基本的に「モノを大切にする・捨てない」という伝統があり、相当痛んだ聖教や什物でも大切に保管している場合が少なくない。とりわけ明恵上人に直接関わるものであれば、寺宝として大切に扱われてきたであろう事は推測できる。実際、明恵上人自筆にかかる聖教類は数多く現存するし、上人所持と伝えられる什物・絵画なども多い。このような流れに掛板をおいて考えれば、明恵上人御作として長く受け継がれてきたとしても十分首肯される。

その観点から、この掛板を見れば板の状態は極めて良好でそれほど長い年月を経ているようにも見えないが、文面の筆跡は明恵上人の自筆資料と極めて良く似ている。例えば、ほぼ同時期に作成されたことが確実で明恵上人自筆のものとして著名な、「大唐天竺里程書」（重書10）一通はほぼ同時期元久元年頃のものと推定されているのであるが、この筆跡と非常によく似ている。特に共通して出てくる漢字の「毎」「日」「五」「也」などは酷似しており崩した書体の「印」などもよく似ている。建仁元年（1201）と元久元年（1204）はともに紀州において修学していた時期のものであることも共通性がある。

さらには、もしこの掛板が後の複製であるとしたら、それはどのような目的があったのであろうか。すでに、高山寺では華厳の法統は途絶え、真言密教を中心的な教理とする寺院に変化していた時期に、わざわざ明恵上人ゆかりのものとはいえ、これほどまでに忠実に掛板を作成する理由がないと思われる。しかも、江戸時代初期寛永頃の「学問印信」書写本には掛板からの忠実な穴の数・位置・寸法等も写されているのも現物をみたことによる転写と考える方が自然である。

以上のことから、現状では積極的な証拠は筆跡のみではあるが、（消極的な）状況証拠としては、この発見された掛板は建仁元年明恵上人御作のものと推定するのが適当であり、まさしく高山寺にとっては寺宝の一つが（再）発見されたものとして追加させるべきと考えられるのである。

（三七）

なお、今後の課題として、①「学問印信」書写本の系統と書き込みの解明、②書写本本文の校異、③掛板の来歴と保管の実態の解明、④「課業印信」の内容検討、などがあげられるが、今回は掛板の発見と体裁を中心に紹介するにとどめ、これら課題はすべて後考を考えている。

注

一　徳永良次「高山寺・義淵房霊典と覚薗院代々（一）」（北海学園大学「人文論集」第三十八号　二〇〇八年三月）
同　「高山寺・義淵房霊典と覚薗院代々（二）」（北海学園大学「人文論集」第四十二号　二〇〇九年三月）

二　もちろん先行研究で義淵房霊典の事績については多く紹介されている。
奥田　勲『明恵――遍歴と夢――』（東京大学出版会　一九七八年一一月）
田中久夫『鎌倉仏教雑考』（思文閣出版　一九八二年二月）

三　注一文献に遡る筆者の以下の論考も聖教目録の成立から見た霊典について言及している。
徳永良次「高山寺における聖教目録の形成について」（築島裕博士傘寿記念『国語学論集』汲古書院　平成十七年十月）
同　「高山寺初期における聖教の保管と整理――古目録を手掛かりとして――」（訓点語学会「訓点語と訓点資料」第一四輯　平成十七年三月）
同　「『聖教目録／禅浄房／潅頂』解題」（『続高山寺経蔵古目録』東京大学出版会　二〇〇二年三月）

四　高山寺の聖教目録作成については、従来建長年間に大規模に行われたとされていたが、筆者の調査により寛喜年間以前に禅浄房によって着手され、その後定真、霊典が編成替えと共に聖教目録の整理を行ってきたことが明らかになりつつある。この点に関しては、注三文献に詳述している。

五　方便智院聖教目録については、次の論考が有益である。
奥田　勲『明恵――遍歴と夢――』（東京大学出版会　一九七八年一一月）

金水敏「方便智院聖教目録解題」（『明恵上人資料第四』東京大学出版会　一九九八年一月）
宮澤俊雅「方便智院聖教目録解題」（『続高山寺経蔵古目録』東京大学出版会　二〇〇二年三月）
また、
石塚晴通「明治十八年高山寺『宝物寄附物古文書什物取調牒』」（平成二十年度高山寺典籍文書綜合調査団「研究報告論集」）
では「方便智院聖教目録」を文明期とされている。

六　注一文献参照

七　石塚晴通「明治十八年高山寺『宝物寄附物古文書什物取調牒』」（平成二十年度高山寺典籍文書綜合調査団「研究報告論集」）

八　高山寺が幾多の戦乱や火災・水害といった自然災害にさらされていたことは、注四の奥田　勲『明恵――遍歴と夢――』に述べられており、聖教の伝存状況を中心とした考察の中にも、さまざまな困難な状況があったことが記述されている以下のような論考がある。
奥田勲他『高山寺経蔵古目録』東京大学出版会　一九八五年二月）
金水敏「方便智院聖教目録解題」（『明恵上人資料第四』東京大学出版会　一九九八年一月）
宮澤俊雅他『続高山寺経蔵古目録』　二〇〇二年三月　東京大学出版会）

九　石塚晴通「明治十八年高山寺『宝物寄附物古文書什物取調牒』」（平成二十年度高山寺典籍文書綜合調査団「研究報告論集」）

十　石塚晴通・大槻信「高山寺経蔵現存経箱識語」（『高山寺経蔵典籍文書目録　完結編』汲古書院　二〇〇七年十二月）

十一　明恵上人示寂後の高山寺における教学活動の統括的な研究は、近時、土井光祐氏により精力的に行われている。
土井光祐「高山寺関係聞書類の資料的性格と学統――講説聞書と伝授聞書とをめぐって――」（訓点語と訓点資料　第九十五輯　一九九七年三月）
また、対照的に方便智院の空達房定真を第一世とする真言宗の活動が非常に活発であったことは、早くから次の論考に統計的に詳述されている。

（三九）

（四〇）

小林芳規「高山寺経蔵の鎌倉時代の典籍について」（『高山寺典籍文書の研究』東京大学出版会　一九八〇年十二月）